

報告番号	※ 第	号
------	-----	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 日本語の反復構文「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」「VP<sub>1</sub>ても VP<sub>2</sub>ても」「NP<sub>1</sub>でも NP<sub>2</sub>でも」の意味特徴

氏 名 崔 小萍

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は日本語の反復構文「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」「VP<sub>1</sub>ても VP<sub>2</sub>ても」「NP<sub>1</sub>でも NP<sub>2</sub>でも」の意味特徴について論じたものである。考察にあたっては、取り立て助詞「も」の意味の受け継ぎという視点から、単独で使われる「も」「ても」「でも」の意味と、それぞれが反復した「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文、「VP<sub>1</sub>ても VP<sub>2</sub>ても」構文、「NP<sub>1</sub>でも NP<sub>2</sub>でも」構文の意味を比較することにより、「も」「ても」「でも」を単独で使う場合とは異なる構文としての意味を明らかにした。

まず第1章では本研究の目的を提示し、第2章では先行研究について概観した後、本研究の立場について論じた。本研究の目的は取り立て助詞「も」の意味の受け継ぎという観点から、「ても」「でも」の意味特徴および「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文、「VP<sub>1</sub>ても VP<sub>2</sub>ても」構文、「NP<sub>1</sub>でも NP<sub>2</sub>でも」構文の意味特徴を明らかにすることにある。先行研究では単独で使われる「も」「ても」「でも」の意味と、それぞれの反復構文の意味の関連性について断片的に論じられていたが、本研究ではこれを「も」の意味の受け継ぎという観点から統一的に意味の関連性が記述できることを主張した。

第3章では「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文の意味特徴について論じた。取り立て助詞「も」には「累加」「極限」「ぼかし」の3つの意味があるのに対し、「NP<sub>1</sub>も NP<sub>2</sub>も」構文では「累加」の意味しか受け継がれていないことを指摘した。ただし、NPが数量語や疑問語の場合は、「も」は「極限」の意味をそのまま引き継ぎ、強調や意外の意味を表すこ

とも指摘した。また、NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>の関係について、両者間に特に順序性が見られない場合もあるが、NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>の間に順序性が見られる場合は、時系列的に「前―後」の順序、重要度が「大―小」の順序、数量語か「疑問語＋量詞」の場合の程度の「低―高」の順序があることを明らかにした。

第4章では「VP<sub>1</sub>でも VP<sub>2</sub>でも」構文の意味特徴について論じた。接続助詞「でも」には「累加」（順接）と「極限」（順接、逆接）の2つの意味があり、「VP<sub>1</sub>でも VP<sub>2</sub>でも」構文では「順接」と「逆接」のいずれの意味もできるが、VP<sub>1</sub>と VP<sub>2</sub>の内容によってその受け継ぎ状況が異なることを主張した。「VP<sub>1</sub>でも VP<sub>2</sub>でも」構文は重複タイプと非重複タイプに分けられ、このうち重複タイプは「でも」の「逆接」の用法しか受け継がれないのに対し、非重複タイプは「逆説」も「順接」の用法も受け継いでいることを明らかにした。また、重複タイプの場合は VP<sub>1</sub>と VP<sub>2</sub>が同じ動詞で重複関係になるが、非重複タイプの場合は VP<sub>1</sub>と VP<sub>2</sub>の関係に、並列関係、進捗関係、包含関係の3つがあることを指摘した。さらに「疑問との共起」の場合は、VP<sub>1</sub>と VP<sub>2</sub>が「包含関係」になるが、「でも」は「逆接」にも「順接」にも使用できることを指摘した。

第5章では「NP<sub>1</sub>でも NP<sub>2</sub>でも」構文の意味特徴について論じた。「でも」には一語として使われる場合には「極限」と「ぼかし」の意味があり、このうち、「極限」にはさらに「極端な例示」と「全面肯定」という意味が分類でき、「ぼかし」はすなわち「確定回避」の意味である。また、「累加」には手段や場所を限定する意味の格助詞「で」＋「も」と肯定・否定を表す断定の「で」＋「も」があることを指摘した。本研究では、これらの「でも」をまとめて見るため、計5種類の「でも」の反復構文の意味を考察した。このうち、「極端な例示」「全面肯定」「格助詞「で」＋「も」「断定の「で」＋「も」」の「でも」は反復構文においても単独で使用される「でも」の意味が引き継がれるが、「確定回避」の「でも」の反復構文には、その意味が受け継がれない。また、NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>には名詞の性質や名詞が表す集合の範囲によって、並列関係、属性関係、連係関係、包含関係の4つの意味関係があることを指摘した。

第6章では「～も～も」と「～でも～でも」の使用をめぐって、選択傾向と許容傾向の2つのアンケート調査を行い、日本語母語話者と日本語学習者における選択傾向と許容傾向の違いを計量的に考察した。選択傾向の分析にはカイ二乗分布を利用した

独立性の検定を用い、許容傾向の分析には階層的クラスタ分析を用いて、日本語母語話者と日本語学習者の特徴を明らかにした。

選択傾向を分析した結果、独立性の検定で有意であった課題文は 25 問中 17 問であり、日本語母語話者の選択傾向は明瞭であり、「も」または「でも」に明確に分かれる傾向が見られた。これに対して、日本語学習者における「も」と「でも」の選択率の差は日本語母語話者と比べて小さく、±40%くらいで分散している項目が 25 課題文の内 14 項目であり、全体として選択に迷っている様子が見られた。

許容傾向を分析した結果、日本語母語話者が許容した課題文には、「～も～も」の許容度が高いクラスタⅠ、「～でも～でも」の許容度が高いクラスタⅡ、「～も～も」も「～でも～でも」も許容度が高いクラスタⅢに分かれた。一方、日本語学習者が許容した課題文の許容度は 40%以上のエリアに点在する場合が多く見られ、データのほとんどが一箇所にプロットしており、クラスタを分けて分析することが困難であった。そこで、日本語学習者と日本語母語話者の差を考察した結果、クラスタⅠの課題文については、日本語学習者が日本語母語話者より「～も～も」を低く許容する傾向を示し、一方「～でも～でも」を高く許容する傾向を示していた。クラスタⅡはクラスタⅠと正反対の許容傾向を示していた。クラスタⅢは課題文に対して、日本語学習者は日本語母語話者より「～も～も」も「～でも～でも」も低く許容することが分かった。しかし、許容差はクラスタⅠおよびクラスタⅡと比べて大きくなかった。その要因は次のとおりであると考えられる。①日本語学習者は取り立て助詞「でも」、断定の「で」＋「も」をうまく区別して使用することができていない可能性がある。②日本語学習者は、「～も～も」と「～でも～でも」との区別がつかず、意味理解が類似したものであると認識している可能性がある。③日本語学習者は、数量語が連続的に使用する表現では、「～も～も」と「～でも～でも」の使用に慣れておらず、抵抗感を感じている可能性があり、「ある」「ない」のような表現では、「である」「でない」のような判断を示す表現を連想することが難しい可能性がある。

最後に第 7 章では結論を述べ、第 1 章から第 6 章までで得られた知見をまとめ、本研究論文の意義と今後の課題について総括した。